

「君たちはどう生きるか」 吉野 源三郎著 岩波文庫 1982年11月発行

皆さんは落語を聞いたことがあるでしょうか？落語は日本の伝統的な話芸の一つで、最後に「落ち」がつくのが特徴です。落語には、貧乏長屋、気の短い江戸っ子、火鉢やキセルなどがよく登場します。私たちは日常で、貧乏長屋、気の短い江戸っ子、火鉢やキセルに触れることはもうありませんが、落語が現在でも語られているのは、登場人物や物語の根本的な部分で、「そういう人って自分の周りにもいるよね」、「こういう話ってよく聞くよね」と、今日の私たちでも共感して楽しめるからなのでしょう。

さて、いきなり脱線から始まりましたが、私が推薦する「君たちはどう生きるか」は、1937年に初刊が執筆されています。戦前の本なので、話の中に小僧さんや女中さんが登場し、世の中の大多数は下町に住んでいる貧乏人で、医者や政治家、高級官僚や大会社の社長など一部の特権階級の子供だけが学校に通う設定になっています。しかし、登場人物や物語の根本的な部分は、全く古さを感じさせません。そして、私がこの本を推薦する大きな理由は、この本が皆さんに、社会の仕組み、人間の尊厳、人間関係、不意に襲う試練への心構えなどについて、自分なりに考える方法を教えてくれるからです。

私の恩師のひとりに「知識は動物でも伝授できるが、知識の習得法を伝授できるのは人間だけである」と言ったかたがおります。この本は、物事を自分なりに考えるため（すなわち自分なりの知識の習得）の方法論を教えてくれるものです。物事を自分なりに考える能力は研究者として必要不可欠ですが、それ以前に、ひとりの人間としても大切な能力だと思います。自分の考えを持たず、他人からどう見られるかのみを考えて行動する人が（残念ながら、世の中にはそういう大人が散見されます）、人間として信頼されるのでしょうか？最後に、著者の文章に倣い一言申し添えます。この本を読んだ後、君たちはどう生きますか？